

第18回 第3回校舎増築 前編



増・新築校舎概観（学校前の通り：ニーダーカッセル・キルヒヴェーク 38 番地）

JISD の宝「第14回 ランカー校舎」で書いたように、1983年8月に中学部がランカー校舎に移転したこの年の4月には、720名収容の本校舎に何と848名もの児童・生徒が入って来たので（小671、中177）取り敢えず1学期は小4の3学級（115名）はドン・ボスコシュレの隣接校舎を借りて急場を凌いだ。

2学期から独立した中学部はその後、1988年4月末の269名まで毎年増加し続けたが、小学生は不思議なことに90年の664名まで7年にも亘り665名前後の横這い。ところが91年4月末に一気に712名となり収容能力の限界に近付いた。1980年代後半、所謂バブル経済に乗った日本企業は1990年に何が起きたか（後刻バブル崩壊と名付けられた現象に）気付かず、「行け行けドンドン」で駐在員を送り続け、本校では1992年4月末には到頭1000名を越して1004名に達した（統計の998名は5月1日付）。

この傾向を見る限り91年5月と12月の2度に亘る法人臨時会員総会で第3回増築が決定されたのも止むを得なかったと言える。「増築」といっても既存の平屋の離れ校舎1316㎡の改修に、増築部3515㎡であるから「殆ど新築」に近い形で、地上3階、地下（ガレージ）の1階建て480名（12教室）収容校舎である。

基本設計は新校舎建築（1972/73）、第1回増築（1974/75）、第2回増築（1978/79）を手がけたキルヒホフ設計事務所が既存の校舎の外観や全体のコンセプトに合うように設計し、工事の施工は竹中工務店と清水建設が共同企業体（コンソーシウム）を作り92年6月初めに着工、約10ヵ月後の93年4月中旬に完成して新学期からの使用に間に合わせた。落成式は1993年5月25日（火）午前11時から小ホールで実施された。

これで本館（旧校舎）の13教室と新館の12教室の計25教室で1000名収容可（40名 x 25教室）となり、将来の小学部全学年4学級編成に対処できるようにした。事実1992年4月開始のこの年は中3が2学級以外全学年3学級編成で、小2、小4などは135名前後で4学級も視野に入っていた。

建物は初期の駐車場地に 1978/79 年に建てられた第 2 次増築の平屋 5 教室に、2 階と 3 階を上積みし、更に敷地東側の学校菜園の方へも拡張して 12 の一般教室を確保、地上階にはグラウンド直結の職員室の他、校長室、事務室関係、保健室、相談室、会議室、休憩室等の管理部門、3 階には家庭科室、コンピューター室、387 m²の小ホール、ハウスマイスター住居、床は全て電気暖房。一方地下ガレージは従来の 645 m²から凡そ 1400 m²に拡大。また身障者用のトイレや地下から 3 階ホールまでのエレベーターも設置。設計に当ってはキルヒホフ建築士は交通量が比較的多いニーダーカッセル・キルヒヴェークと、この通りを挟んでの学校前が住宅地であることから、通りに面した建物の地上階の張り出し量がそのまま上部に上乘せされると周囲に「威圧感」を与える事を配慮し、上階に行くに従って四方の幅を小さくしている（図面参照）。

費用については 1991 年に政府に提出した所謂（いわゆる）シドニー方式の国庫補助申請が却下され、一方生徒数急増への対処が焦眉の急となっていたため（国庫補助認可の決定を何年も待っている訳には行かず）、企業からの寄付金と積み立ててあった自己資金と不足分を銀行借入で賄う事にして工事を敢行。当初の予定では総額 1000 万マルク（当時 7 億 7 千万円）の総工費に対し、寄付金 450 万マルク、自己資金 400 万 DM、銀行借入を 150 万 DM と見積っていたが最終的には 950 万 DM 以内の支出で済んだこと、また日本経済のリセッションに入る前の募金の呼びかけと、東京の海外子女教育振興財団による（日独での）寄付金取り纏めのご支援のお陰もあり（財団への入金約 200 万マルク）、当初予定よりも 50 万 DM も上回る 500 万マルクの寄付金を得られたことで金利の高い銀行借入をしないで済んだ。その代わり自己資金を全て放出したため 2 年連続で授業料を値上げせざるを得なかった。

尚この第 3 回増築／新築工事が完成した 1993 年 4 月には、前年 1992 年 4 月に 1000 名いた生徒数は 100 名減の 897 名に、94 年には 805 名、創立 25 周年の 95 年 5 月には 736 名、96 年には 705 名と、まるで釣瓶（つるべ）落しのように生徒数が右肩下がりに減っていったのは大変皮肉な結果であった（後編に続く）。

